

■ PCN だより

PCN Volume 65, Number 6 の紹介

2011 年 10 月発行の *Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN)* Vol. 65 No. 6 には、Review Article が 1 本、Regular Article が 4 本、Short Communication が 3 本、掲載されている。今回はこの中から外国からの投稿された 3 本の内容と、日本国内からの論文については、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

(外国からの投稿)

Review Article

1. Psychiatric complications of treatment with corticosteroids: Review with case report

Heather A. Kenna MA, Amy W. Poon MD, C. Paula de los Angeles BA, Lorrin M. Koran MD

Department of Psychiatry and Behavioral Sciences, Stanford University Medical Center, Stanford, USA

コルチコステロイド治療に伴う精神科合併症状について

コルチコステロイドは現代医療の中で広く使用されているが、精神科が関与する副作用も起こりうる。医師および専門家には、このような副作用の可能性、予防の方法、対応法についての知識が必要とされる。本総説では、四半世紀に報告された成人のコルチコステロイドの副作用による精神症状を概説し、コルチコステロイド誘発性うつ病の症例を提示する。PubMed と PsychLit データベースにてコルチコステロイドとステロイドおよびそのジェネリック薬剤名と精神症状および精神症候（精神病、躁、軽躁、抑うつ、無気力、不安、パニック、離人、せん妄、錯乱、幻覚、妄想、パラノイア、認知障害、認知症）とで検索した結果、55 件の症例といくつかの臨床試験が検索された。発生率、用量、危険因子、経過、

治療の結果をまとめて表に示した。コルチコステロイド治療による精神科合併症は少なからずあり、不安・不眠から気分障害、精神病性障害、せん妄、認知症まで多岐にわたっていた。コルチコステロイドの減量あるいは中止により精神症状は消失したが、コルチコステロイドの減量ができなかつたり、精神症状の重篤さのために向精神薬が必要な場合もあった。コルチコステロイドによる精神症状を理解するために今後のさらなる検討が必要と思われる。

Regular Article

1. Serum cortisol and dehydroepiandrosterone-sulfate levels in schizophrenic patients and their first-degree relatives

Osman Yildirim, MD¹⁾, Orhan Dogan, MD²⁾, Murat Semiz, MD²⁾ and Fatih Kilicli, MD³⁾

1) Department of Psychiatry, Sirnak Government Hospital, Sirnak, Departments of 2) Psychiatry and 3) Endocrinology and Metabolism, Cumhuriyet University, Sivas, Turkey

統合失調症患者およびその第一親等家族の血清コルチゾール値とデヒドロエピアンドロステロン値について

【目的】コルチゾールとデヒドロエピアンドロステロン (DHEA-S) 値の変化は統合失調症を含む精神疾患の病理に関与していると言われていた。血清中コルチゾール値と DHEA-S 値の統合失調症の病理過程への関与を明らかにすることを目的として本研究を行った。【方法】統合失調症患者 60 名、その第一親等者 70 名、健常者 60 名について、背景、罹病期間、重症度、使用薬剤を調査し、血清中コルチゾール値と DHEA-S 値を定量した。【結果】患者群の血清中コ

ルチゾル値と DHEA-S 値は、第一親等者群および健常者群と比較して有意な高値を示した ($P < 0.05$)。また第一親等者群のコルチゾル値は健常者群と比較して有意に高値であったが ($P < 0.05$)、DHEA-S 値は有意差がなかった。血清中コルチゾル/DHEA-S 比は三群間に有意差を認めなかった。【結論】統合失調症患者群の血清コルチゾル高値は、統合失調症の病理過程にコルチゾルが関与することを示している。また第一親等者群でもコルチゾル高値が見られたことは、症状の発現がなくても遺伝的素因に基づく同様の病理過程が第一親等者群にも起こっていることを示唆する。血清 DHEA-S 高値は、コルチゾル上昇に対する二次的なものとも考えられる。血清コルチゾル値と DHEA-S 値は統合失調症診断のバイオマーカーとして使用できる可能性があるが、さらに多数の症例での検討が必要である。

Short Communication

1. Poorer Wisconsin card-sorting test performance in healthy adults with higher positive and negative schizotypal traits

Ting Gang Chang MD^{1,2}, Hui Lee MD^{3,5,6}, Cheng-Chen Chang MD¹, Yen Kuang Yang MD^{3,5,6}, Si Sheng Huang MD^{2,7}, Kao Chin Chen MD^{3,5,6}, Chieh Hui Wang MD², Yun-Hsuan Chang MPhil^{3,4}

1) Department of Psychiatry, Changhua Christian Hospital, 2) Department of Psychiatry, Changhua Christian Hospital Lutung Branch, Changhua, 3) Department of Psychiatry, College of Medicine, 4) Division of Clinical Psychology, Institute of Allied Health Sciences, 5) Addiction Research Center, National Cheng Kung University, 6) Department of Psychiatry, National Cheng Kung University Hospital, Tainan, 7) Center of General Education, Central Taiwan University of Science and Technology, Taichung, Taiwan

高いスキゾタイプル (陽性および陰性)素因の健常者では Wisconsin card-sorting test の成績が低下している

臨床症状を呈さないスキゾタイプル患者で、Wi-

スコンシンカードソーティングテスト (WCST) 成績の低下が報告されているが、これまでの結果は一定していない。そこで、177 名に Schizotypal Personality Questionnaire (SPQ) を施行し、その陽性得点と陰性得点の四分法により、高い陰性得点かつ高い陽性得点群 (17 名) と低い陰性得点かつ低い陽性得点群 (16 名) について WCST 成績を比較した。高陰性・高陽性群は低陰性・低陽性群と比較して WCST の終了カテゴリー達成数が有意に少なかった。スキゾタイプル素因の高い人には軽度認知機能障害が考えられる。

(文責: 武田雅俊 PCN 編集委員長)

(日本国内からの投稿)

Regular Articles

1. Changes in communication skills of clinical residents through psychiatric training

M. Yutani, M. Takahashi and H. Miyaoka

研修医の精神科研修を通じたコミュニケーションスキルの変化

【目的】本研究の目的は、精神科研修前後で臨床研修医のコミュニケーションスキル (CS) が変化するか、変化するならば CS と関連する要因はなにかを明らかにする。【方法】本研究への参加に同意した 44 名にコミュニケーションスキルとそれに関連すると思われるソーシャルスキル、自尊感情、不安、抑うつ傾向についての自記式アンケートを 2 ヶ月間の精神科研修開始時と終了時に実施した。研修前後の両方の質問紙に回答した 34 名を解析対照とした。【結果】CSQ 得点 ($t[32]: -2.17, P < 0.05$) と CSQ の下位因子である主張的 CS 得点 ($t[32]: -2.74, P < 0.01$) が研修後に有意に上昇した。協調的 CS 得点は研修後に上昇傾向にあった。CSQ 総得点と強調的 CS 得点の変化は、自己効力感と正の相関を示し、不安と抑うつ傾向との間にそれぞれ負の相関を示した。主張的 CS 得点の変化は、自己効力感と弱い正の相関を示した。【考察】精神科研修によって CS、特に主張的 CS と協調的 CS が向上することが示唆された。CS を改善させるには、自己効力感を増加させることと、抑うつ気分と不安を減少させることが有効

であると考えられる。

2. Development of the Psychiatric Nurse Job Stressor Scale (PNJSS)

H. Yada, H. Abe, Y. Funakoshi, H. Omori, H. Matsuo, Y. Ishida and T. Katoh

精神科看護師職業性ストレス尺度の開発

【目的】精神科看護師の職業性ストレス尺度 (PNJSS) を開発し、PNJSS の信頼性と妥当性を評価することを目的とした。【方法】精神科看護師のストレスに関連する過去 10 年間の文献を参考に、63 項目で構成された精神科看護師職業性ストレス尺度を作成し、302 人を対象に統計解析を行った。【結果】探索的因子分析の結果、「精神科看護の能力」、「患者の態度」、「看護観」、「やりとり」の 4 因子 22 項目が抽出された。PNJSS の信頼性を検討した結果、Item-Scale 相関係数は $r=0.265\sim 0.570$ ($p<0.01$)、Cronbach の α 係数は $0.675\sim 0.869$ 、再テスト信頼性係数は $r=0.439\sim 0.771$ ($p<0.01$) であった。職業性ストレス簡易調査票を用いて PNJSS の妥当性を検討した結果、収束的妥当性は $r=0.172\sim 0.413$ ($p<0.01$)、予測的妥当性は $r=0.201\sim 0.368$ ($p<0.01$) であった。因子の妥当性における因子モデルのデータへの適合性は、 χ^2/df ($343.189/196$, $p<0.01$) = 1.750, GFI (Good of Fit Index) = 0.910, AGFI (Adjusted Good of Fit Index) = 0.883, CFI (Comparative Fit Index) = 0.924, RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) = 0.050 の値を示した。【考察】PNJSS は 4 因子 22 項目構造で十分な信頼性と妥当性を有し、精神科看護師の職業性ストレスを評価できるツールとして有効であると考えた。

3. Possible effectiveness of intervention using a self-teaching workbook in adolescent drug abusers detained in a juvenile classification home

T. Matsumoto, Y. Chiba, F. Imamura, O. Kobayashi and K. Wada

少年鑑別所入所者に対する薬物再乱用防止のための

自習用ワークブックによる介入の有効性

少年鑑別所に入所する薬物乱用者 85 名に対し、我々が開発した再乱用防止のための自習ワークブック「SMARPP-Jr.」を実施し、介入前後の評価尺度上の変化から、薬物問題の重症度と介入効果の相違について検討した。その結果、薬物問題の重症度に関係なく、自習ワークブックの実施後には、問題意識の深まりと治療動機の高まりを反映する評価尺度が顕著に上昇した。しかしその一方で、薬物欲求に抵抗できる自信、自己効力感には著明な変化が見られなかった。以上により、自習ワークブックを用いた矯正施設での介入は、薬物乱用に対する問題意識を深め治療動機を向上させるのには有効であるが、薬物依存に対する自己効力感を高めるには、施設入所後に、地域における継続した支援体制が存在する必要があると考えられた。

Short Communications

1. Psychosocial and psychiatric aspects of suicide completers with unmanageable debt: A psychological autopsy study

A. Kameyama, T. Matsumoto, Y. Katsumata, M. Akazawa, M. Kitani, S. Hirokawa and T. Takeshima

負債を抱えた自殺既遂者の心理・社会的特徴：心理学的剖検による検討

本研究では、心理学的剖検の手法によって情報収集がなされた自殺既遂事例のうち、負債を抱えた中高年男性事例 (負債群) 16 例の心理社会的特徴を、負債のなかった中高年男性事例 (非負債群) 23 例との比較を通じて明らかにした。負債群では、自営業者、離婚経験者が多かった。また、両群ともに何らかの精神障害に罹患している者の割合が多かったが、負債群では死亡 1 年前に精神科受診をしていない者が多いことが示された。本研究から、中高年の自殺予防において、包括的な支援を提供し、精神科などへの援助要請を促進することの重要性が示唆された。

2. Cerebral blood flow changes in very-late-onset schizophrenia-like psychosis with catatonia before and after successful treatment

N. Tsujino, T. Nemoto, T. Yamaguchi, N. Katagiri, N. Tohgi, R. Ikeda, N. Shiraga, S. Mizumura and M. Mizuno

昏迷状態を呈した最遅発性統合失調症様精神病 (very-late-onset schizophrenia-like psychosis) の治療前後における脳血流変化——例報告——

初老期・老年期に発症した統合失調症様病態は、思春期・青年期に発症する統合失調症と区別し遅発性統合失調症 (late onset schizophrenia) と呼ばれている。しかし、初老期・老年期初発の統合失調症様病態に関する研究は、国内外を問わず決して多くはない。我々は、昏迷状態を呈した最遅発性統合失

調症様精神病 (very-late-onset schizophrenia-like psychosis) 患者の脳血流変化部位を調べた。症例は、64歳の女性で被害妄想が出現した後に昏迷状態に至った。治療前後にSPECT検査を施行し、easy Z-score imaging system (eZIS) を用いて画像解析し、脳血流変化部位を調べた。治療前は、線条体、視床の血流低下を認め、左外側前頭皮質、左側頭皮質で血流増加が認められた。治療後は、治療前に認められた血流不均衡は消失し、一方で運動皮質での血流増加が認められた。本症例の治療前後に認められた脳血流変化が昏迷も含めた精神症状と関連している可能性が示唆された。

(精神神経学雑誌編集委員会)